

本論文は105頁、400字詰原稿用紙にして450枚に及び、質量ともに1冊の本に匹敵する大作である。多分、中山書店からの執筆依頼枚数をはるかに超えた論文であることは間違いないところで、今日、これだけの紙数を割く長文の論文を収載してくれるシリーズ本は考えられないだろう。この点をもってしても、1975～1981（昭和50～56）年に刊行された『現代精神医学大系』がいかに高邁な精神のもとに企画されたのか容易に察せられることだろう。この長文の論文はまた、当時わが国の精神医学において、精神病理学が、なかでも哲学者 Husserl や Heidegger の哲学に連動する形で発展をみた人間学・現象学的なアプローチがいかに重視されていたのかをよく示す。この見地は、一言でいえば、人が世界において、他者とともに生きているという人間存在の社会性、共同存在性、また歴史性に注意を払って精神疾患を抱えている患者のあり方を理解し、治療論を引き出すことを目指すものである。本論文では、人間学的・現象学的なアプローチの成立の歴史的背景にはじまり、さまざまな学説について周到に論述されている。そのなかには統合失調症の理解では必須文献であるものの、邦訳がないため、わが国ではほとんど忘れられてしまった学説の紹介、コメントがある。この点でも本論文は貴重である。

たとえば、太古的思考様式との関係で統合失調症の妄想に光を当てた Storch の論考や、人間が世界に生きるうえで必然的にもつ負い目に注目して、統合失調症の迫害妄想、誇大妄想などを理解することを試みた von Siebental の著作などにも目配りがなされている。さらにイタリアの Basaglia が、フランスの代表的な精神病理学雑誌『精神医学の進歩』（1965）に掲載の「身体、まなざし、沈黙——精神医学における主体性の謎」と題した論考において、Merleau-Ponty の現象学に立脚しながら、まなざしと沈黙が、「ここに一いる」主体の成立にとり不可欠な契機であるといった高度な哲学的省察をしていることに言及がなされている。この Basaglia こそ、イタリアで精神病院の閉鎖運動をはじめた人物にほかならない。このたび、本論文をしっかりと読み、Basaglia が若いときに現象学的精神病理学の方面の考察をしていたことを初めて知った次第で、個人的にはささやかな発見であった。

関 忠盛先生は、自治医科大学精神医学教室の立ち上げの時点からの教室の一員で、宮本忠雄先生にもっとも忠実な第1弟子であった。その関係で、宮本、関の共著論文は多数あり、本論文もその一つである。私が自治医大にレジデントとして入局させていただいた時、関先生は講座助手で、毎週水曜日の症例検討会の後、Jacques Lacan の博士論文『パラノイア精神病』の抄読会を宮本・関先生を中心に行っており、私もさっそく参加させていただいた。その成果が宮本・関訳『パラノイア精神病』（朝日出版、1987）に結実したのである。関先生は茨城県立友部病院に転任になってから、大変残念なことに、1992年7月（50歳）、自ら率先して行っていたスポーツのレクリエーション中の不慮の骨折がもとで急逝されてしまった。「分裂病性加害妄想について」（臨床病理 1：1981）

や「分裂病性残遺妄想」（臨床精神医学 **16**：1987）をはじめとした卓越した単著論文を収録した追悼論文集が『現象学的人間学と妄想研究—関忠盛著作集—』（星和書店、1994）と題され出版された。関先生の臨床に根ざした地道な論考から、私は多くのものを学ばせていただいた。この著作もぜひ、読んでいただきたい。

（加藤 敏）